



慶長年間江戸圖考

全

3015



慶長年間江戸圖考



去五味均平蔵

本 貸

京橋區南紺
集古堂印
屋町十九号地



慶長年間江戸圖考
 慶長年中江戸の事も乃中し少くはしその事も少くはし
 傳りしが云々十二年ふらり〜ものごとつと其時〜事あることハ勿論
 也きまこと十二年とも是れ〜き〜今據るは圖ハ乃其の事ハ勿論
 直孝ハ乃長十二年叙任也 月日と 實ハ挿叙とあるを願の文
 字と異せし〜事ハ印を以例多ク 酒井雅樂助長十二年
 七月三日改む高堂依酒也高虎を同き自私泉也と改回後於
 理元清成ハ同年十月五日五十四歳卒なり 大復賀出將也忠政
 ハ十二年九月十一日廿七歳卒入忠政ハ十六年ハ卒れといハ
 疑也 諸記ヲ移るを考忠政ハ卒年ハ
 十一年の〜と云ハ其の〜と云ハ
 四月廿日叙任ニテ 戦中事といハ是りきまこと〜ハ因紀との事これと
 之ハ推しはつゝのあり〜と云長十二年ヨリ十四年乃間と云

是と書くくは十二年、そのところをいふたうをまことかゝるも乃ハ
年とし人の名をも改まることすめまハ叙任乃青いひて推と事と
とをんりそれも大なるハそをいふ世々唱束りしをいふともなハ必
いひうくはま十二年、ありしとをんりおちやうたうをいふは又
説は是ハ西南の方とゞれハことと二枚ありしそのつちハ我乃二枚
乃くありしあんとこと乃後もうやういひうくしき故を見聞集ふ云

は書ハ安長十九年
はありしものなり 江戸より布い出るふ方の口有南ハ品川口箱ハ田安は是ヨリ

田安の名もとりハ神田は是ヨリカチ 神田系ハ 東ハ浅草はまこ舟はと有 は其ヨリ

水條五代記ハ西ハ物と南の傍 志波は是ヨリ 東ハ浅草はと有りとの志波はハ

ハ別器の乃とれるべし今も是はと唱ふるハ昔是は門たれし所あり

是は門の表しは別
記ありとハいふなり 是はままこの江戸内といふそのはは是とをいふるなり

乃くはあうりたるハハの園乃あるハこら乃乃御城のた衣なる緒

亦く是浦此度狭ホと専と生れはあへし世もく安長志をこし是江戸内

とゆふ南の方ハ今の芝のヨリこれ大なるは能ハ此邸宅多く其ヨリお川ハ

如きくは町屋はささくとも田こま東海道乃大新なるまことのはりもこと

いきをいふはささくささくささくささくささくささくささくささくささく

麹町乃くはささくささくささくささくささくささくささくささくささく

はるこく江戸ヨリ西ハ田安の系といハ此田安はヨリつづまハ今昔町は

ありしは能ハささくささくささくささくささくささくささくささくささく

ハ東野ありしとも西ハの方神田は乃亦も系ありてその神田は乃

柳原乃ありしともささくささくささくささくささくささくささくささく

ては皆山々に見聞集ハ江戸乃是神田乃系より板橋までみこく

竹本ハ是年とあり皆此は成しが柳原ハ是ハ江戸の百系変遷とあり

安長乃初年まはは神田ありしは因しきハ年々山とゆふしは是ハその終末とあり

故竹本とありかぎりあるまは安長乃初年とありし今ハさういふその

わりとありしことハこのまは安長十九年の頃とありしとありし

あまりの形系三里四方の家と流るる物也
神社傳圖をふとふとそとそとておしこ
年中の記を圖をふとふとそとそとて
是ハ淺系北親音乃言つた所も流るる
小橋赤りり天正の記也と宿強の文書有り
個之彼古家予渡者也仍也件 壬午九月九日直景
江戸淺系首西形宿個是ハ白井近是系モ
とるる一舟以つた川を舟乃江戸に
処ハせられたるらと今之跡橋乃船入
一もあつたん又因連書舟町と
四ヶ市首ヨリ 七のそと橋つた有り
文祿七年の夏之記 元年(壬午)の
おの承祿 永正ハ徳政もを
これとそと此跡の所を町のお代
つた所を流るるつた唱はるる
城守のつたハ古半唱を東渡もを
さけ中たりそれよりハ橋と跡
皆つたそとそとの流るる川と
かりこり昔乃棚をハハ流るる
つたそとそとハ流るるおとそと
西 菊のあや 志波以ふ系
是とつた浅系はも同じく
て後諸侯訪本へ面を江戸
れと流るる乃言つたそと
二月十三日ヨリ

外曲神まで家も流るる
とるるハ世ハ傳るる
大正しともつり

在りしと日市乃
是ハ浅系北親音乃言つた所も流るる
小橋赤りり天正の記也と宿強の文書有り
個之彼古家予渡者也仍也件 壬午九月九日直景
江戸淺系首西形宿個是ハ白井近是系モ江戸より淺系ハ宿強ハ海道成
とるる一舟以つた川を舟乃江戸に
処ハせられたるらと今之跡橋乃船入
一もあつたん又因連書舟町と
四ヶ市首ヨリ 七のそと橋つた有り
文祿七年の夏之記 元年(壬午)の
おの承祿 永正ハ徳政もを
これとそと此跡の所を町のお代
つた所を流るるつた唱はるる
城守のつたハ古半唱を東渡もを
さけ中たりそれよりハ橋と跡
皆つたそとそとの流るる川と
かりこり昔乃棚をハハ流るる
つたそとそとハ流るるおとそと
西 菊のあや 志波以ふ系
是とつた浅系はも同じく
て後諸侯訪本へ面を江戸
れと流るる乃言つたそと
二月十三日ヨリ

是ハ浅系北親音乃言つた所も流るる
小橋赤りり天正の記也と宿強の文書有り
個之彼古家予渡者也仍也件 壬午九月九日直景
江戸淺系首西形宿個是ハ白井近是系モ江戸より淺系ハ宿強ハ海道成
とるる一舟以つた川を舟乃江戸に
処ハせられたるらと今之跡橋乃船入
一もあつたん又因連書舟町と
四ヶ市首ヨリ 七のそと橋つた有り
文祿七年の夏之記 元年(壬午)の
おの承祿 永正ハ徳政もを
これとそと此跡の所を町のお代
つた所を流るるつた唱はるる
城守のつたハ古半唱を東渡もを
さけ中たりそれよりハ橋と跡
皆つたそとそとの流るる川と
かりこり昔乃棚をハハ流るる
つたそとそとハ流るるおとそと
西 菊のあや 志波以ふ系
是とつた浅系はも同じく
て後諸侯訪本へ面を江戸
れと流るる乃言つたそと
二月十三日ヨリ

是とつた浅系はも同じく
て後諸侯訪本へ面を江戸
れと流るる乃言つたそと
二月十三日ヨリ

是とつた浅系はも同じく
て後諸侯訪本へ面を江戸
れと流るる乃言つたそと
二月十三日ヨリ

是とつた浅系はも同じく
て後諸侯訪本へ面を江戸
れと流るる乃言つたそと
二月十三日ヨリ

是とつた浅系はも同じく
て後諸侯訪本へ面を江戸
れと流るる乃言つたそと
二月十三日ヨリ

是とつた浅系はも同じく
て後諸侯訪本へ面を江戸
れと流るる乃言つたそと
二月十三日ヨリ

御中丸と西丸北間今此記

永祿七年の春合戦の時亡死をその子と云ふ四郎といひ又討死の
おろり上総國推津城を治むその日江戶二の曲輪と唱へしと後らひ
ふきまは行橋といふ里を西岸ハ小田原没落のとき推津乃城におひて
うち死を其子孫今以合津之遺志ありといひ行橋の西乃方おもひて
おろりし内是ハ合津美津といふ人も西より其年たりて所ハ
御橋の西側とも大正安草ありといふまハ分りりかともいひてし
おれ餘田安乃小川口とあるさるはけい高と此處をその地におろりしれハ
へし物も少り入の後江戸乃城といひて上方に諸侯の邸宅とありし神ハ
横田の方をさやうりといふ落徳集を安長六年圓ヶ原以義以徳利
有り之後上方れらちあて安堂言虎代徳吉岡東元そハ伊達政宗藩奥
乃お人となしとて何れも江戸御城乃造りて屋敷と流ひゆやうといひ
し加 東照宮作らまといひにまも大坂小居宅あまの江戸をめぐらるる
とありてこのころありしうとせやく揚りたるしりし志ありしは
うと外横田多と今此大坂や徳といふありて東西に印標大老
と跡ある面して屋敷とありし
伊達政宗ハ外横田今の御用所を以て安堂と名
せりかの方とてありしれりことし
中が賀申御言利長御いさきつは母堂言春院土方守雅り江戸小田
有り時安長五年六月七日江戸着あり將軍家より御城大守いさきつは唐き屋敷
乃うちあつてあつておろりしとまらけておれり其その唐き屋敷と
を長屋敷といふ定められ 今の道三は春院のわきにおろりし迎平築前を
ヤマト老ハ江戸に少りし徳吉長長も又彈正長政外横田藩々安
とといひまはしりしとも名を安長と名をいふのて備ひしうハ所
とて屋敷といふ屋敷とあり又彈正乃波佐の地と宛め 是おろりて屋敷
ことい多ありしとえおろりし黒田乃城皆横田ナリを大老の跡
迎りしことい加賀の土方春院ナリを後いしといふ知ハ少くは長長十三年は圓のありし
坪よりありて徳吉長安長といふる 又知に屋敷とてさるは中
坊州安國殿御系圖といふものいふ安長七年淺利彈正長政に定め
江戸より江戸に御夜守寸宅と屋敷といひ 中江云を夜守寸八南雲人守
今は西守を夜守寸河岸といふ

尚日如の遊宅一安國殿いまおろりしを跡の跡ありたりておして浅利長政は
はさきおろりし跡ありて跡ありて御城といふは安長七年の

慶長四年八月... 中落穂集云云

大谷小治... 御城の云々

御城新... 御城の云々

御城新... 御城の云々

御城新... 御城の云々

御城新... 御城の云々

御城新... 御城の云々

御城新... 御城の云々

御城新... 御城の云々

御城新... 御城の云々

御城新... 御城の云々

御城新... 御城の云々

御城新... 御城の云々

御城新... 御城の云々

御城新... 御城の云々

御城新... 御城の云々

御城新... 御城の云々

御城新... 御城の云々

御城新... 御城の云々

御城新... 御城の云々

御城新... 御城の云々

御城新... 御城の云々

御城新... 御城の云々

御城新... 御城の云々

御城新... 御城の云々

御城新... 御城の云々

御城新... 御城の云々

御城新... 御城の云々

御城新... 御城の云々

御城新... 御城の云々

御城新... 御城の云々

御城新... 御城の云々

御城新... 御城の云々

乃亦家と給ひしも又一二使も満りしあるへしされ八十二年の末迄ハ
屋敷も宜りし如きこの園も亦一あるべし也此園ハ之とハ
一枚も事此れしあるはそと全きあるべし外様田の邊の果はとも
地味とそつて考ふるわづりの地あるも。そと二軒ありしをのりまこ
りて此の地りしやうお同のりはむがことあるべし物も十三年之後
武家町亦おそつあるべし。見聞集云江戸 泲城を
西とあるは石垣おむあしつ。泲城ハ南向くあるは大木古木ある
ふ木此同ヨリも高やう角を。あつ日れ殿王ハき井をせむ。松風
ハあつりし万歳とらふりとあやしむる。是を田邊漢ハ長孫ハ皆む。是
とりて江戸の城とくその後上取也。餘のそと城とありし時の常備のさむハこのころ
也。と大く。愛さしむる。へ。是長見元云十一年正月江戸。加茂左馬脚松平去代也。
加茂殿後也。松平殿死也。相模左馬脚。是田邊漢也。松平左馬脚。是松平殿也。相模殿後也。
福徳信清也。寺法志也。又二月上旬。各江戸着つれを主人。主江戸人。數ハ右運送也。
為伊豆國とありし石積船と云ふ船也。ありし船と百人持の。入江戸。送還ス江戸

乃亦ハ張亦投あるこのハ坪ハ金判の價なり。國東元ハ去年上洛借事也。寺僧
清光但之上洛せざる故ハ。ある人。其七人。又云。同年江戸石垣五月の末。亦去年九月
玉置集美八月。亦亦言。泲城。經。賞。新。中。殿。て。將軍。家。以。接。接。なり。因云。十二年四月朔日
江戸。普。濟。始。る。因。八。州。安。房。信。濃。越。後。奥。州。出。陣。百。万。石。舟。知。公。但。之。八。百。万。石。三。石。奇
二十万。三。天。守。之。石。垣。ハ。築。く。百。万。石。の。外。ハ。堀。普。濟。是。也。勤。公。右。普。濟。元。お。の。く。二。月。ヨリ
扶持方出ル又云。去年江戸石垣高十八間。月二番ハ切石ナリ。又切石ナリ。ハ二間四方ナリ。ハ
ツキ上。そのと。ハ切石ナキ。合十間。天。守。惣。古。居。も。二。間。上。ラ。合。せ。テ。八。間。乃。石。垣。ナリ。天。守。是。ハ
二十間。四方ナリ。ハ。諸。大。名。高。居。たる。屋。敷。此。を。り。む。ね。平。形。ふ。ハ。所。の。手。し。と。形。ふ。
亦。居。也。あ。ま。く。煙。た。つ。民。の。お。も。い。と。は。縁。の。れ。お。も。い。此。以。大。名。の。家。居。あ。ら。う。こ。れ
た。の。の。あ。ま。く。その。得。ある。こと。ハ。下。の。の。の。の。也。西。辰。記。云。と。不。寺。あり。さ。き。高。野。の。の。の。
又。と。た。せ。敷。回。跡。ハ。浅。草。以。觀。音。ま。し。と。そ。の。の。の。多。く。高。野。を。と。や。ま。れ。ハ。大。士。の。日
人。お。は。そ。と。と。て。平。も。あ。り。り。ら。ふ。實。も。人。の。さ。や。り。以。男。女。乃。群。衆。を。と。と。系。の
法。を。り。り。も。多。く。と。と。の。の。と。竹。斎。物。沈。ま。さ。く。水。由。む。ろ。落。ふ。さ。く。お。も。る。亦。あり
き。亦。の。元。へ。ける。ハ。若。ふ。修。へ。し。浅。草。寺。之。より。お。う。と。甚。ま。と。松。林。指。と。る。と。く
飛。鳥。ハ。樹。と。多。ふ。あり。後。ハ。唐。き。回。下。り。て。是。を。高。野。と。つ。つ。し。た。う。前。ハ。半。島。の。道。次

秩父縣慶徳抄云尚寺ハ其日ヨリ全取進ニ、崇長七年寺焼也轉寺也

今年崇長七達成能轉回地ハ今の對馬橋よりありて其地極東他寺考

少む此寺ハ其地ト云々とあると轉回地ハ對馬橋同の大志ハ是ハ江ノ三條山寺

慶長善法云尚付ハ草創の地見取分の眺所あり比其カハ極東後崇長ハ

東江ノ河川ヨリ其地長三年八月あり江ノ川記云尚寺神貝坂貝坂の

寺ありて光田寺と云ふ其言其地ありてかくすありの地ありて其地ハ

尚寺の地見取集云つゝところ其地の地あるへ、

古祥寺 （此寺ハ其地ト云ふ）

乃其地ありと云ふ當寺園圃畧記云古祥寺ハ今の和合の河川あり

飯沼神社の地地ありと云ふ故と云ふ地極東と云ふと天正十一年 幸

也中ありと云ふ一五代東和南との地の後世其地ありてありて元徳系祥

道のたりありてありと云ふと云ふ地と云ふ地ハ其地ハ其地ハ其地ハ

其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ

其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ

其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ

其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ

其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ

其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ

其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ

其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ

其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ

其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ

其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ

天正十七年氏直父之の後その位僧に任じあり今北昌平橋の内北平伊豆吉上屋敷

の地その地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ

建寺より此僧と考其地と云ふ清産首と云ふ僧希叟と云ふ志より其地

のうらんカレの茅の庵と云ふ長善院といふ地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ

ありしなりと云ふ甲州武田家の武士志村と云ふ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ

天正十年に後頼之の後徳川家と云ふ勅たりやと云ふ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ

いり寺と云ふ其地の君と云ふ十四年乃以退去と云ふて軍人トテ其地ハ其地ハ其地ハ

改宗あり永樂五百支文と云ふ抱つらん地月と云ふ地男色の地地と云ふ地ハ其地ハ

退き其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ

伊達志保浪人の志保浪人の地と云ふ七年の七月十五日の地ハ其地ハ其地ハ其地ハ

何長故善徳所と云ふ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ

我地の四面引おろしたる善徳と云ふあり引けりて其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ

又云つと善徳と云ふ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ

其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ

其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ

其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ

其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ

其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ

其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ其地ハ

台徳院殿も御成ありて吾僕等爲し經營あり素門諸家より高し
冠木と有りふ高標を以て羅漢七四孝あり人形家屋若
木多と彫物ありて金銀をちりハ門乃た右のそしらハ金と銀
友と有り下まきほそありそりともむ地ともみ金ありて皆高し
たるし徳人の門乃た素齋とて物ととも高しとて日くし門
也あそ高し有りて世秀乃り所高ハ長六年より前少ありし
家屋もとこふありしとらん田或書あり長六年正月三日蒲生
飛彈此家より火し門妙り飛彈あり二日後固るをこ回を

御成の時日俄も家作りありれはハ藤相御成ありしとあり門と
御城門と結構とそとそとそ小日暮門の利との御城門のそとそし
又愛々長日記十九年正月乃茶とあり江戸大倉屋敷の一番結構ハ
松平筑前守長政作りまこと門乃結構ハと徳外殿と少法ありと
七月上日江戸新の以上徳外殿夜中焼上候とふあのとそ建し門の

結構ありとそとそ世人稱えとしなるへし

徳外殿とそり此は徳外殿なる

を説き毎川傳を藩は藩令録とありて人の目と知と有りしと有り見は徳外
りわのうもつるさあるれどおのつと世風あることとそへし肉との見見聞集云神とのそ
聞集とそとそ家康とハらつ結構あると嫌ハ江戸御城のうちむる合わるとそ
法度云ハ御田舎のの旁は夫余れ前と金物と將軍あり作付らむゆる御河内妙
ゆうとそ夜中うもそのはとりそは後やそ御新橋江人城さりまはしそそ御心と
皆人稱えとそ金物とあり我もとそとそとそ見とそ蒲生飛彈と考りて徳外
右輝若ととの西行とそりあれは質素草実のわいそそ後史御神と尚家の風ハ
右信と質素と尚いそとそ太閤家の人と徳外の人の中ありけとそ風とそ
彼家の風とあるとそはあそそとそ和とそとそ神乃とそとそ神あり
見聞集云也當若乃御威徳也也事南流とそめ徳外とそ町をたておそ
志とそ小町のそとそ常とそとそ井のそとそしり元法中なるれはあり
万民これとそとそ若きとそとそ民とありれとそとそ神田の御神山の
きり乃とそとそ流とそとそ此のそとそ神田の御神のけけとそや今の地と
あるとそとそ神田のうちむりとそとそ山有し少法ありし山とそ此山とそ

孝長年中江戶の事由 山城とてしめて大谷氏邸宛所
屋のそとにありし山川の如き所もこの神社境内ありし江戶
にもおのひて記ありあまをたせふありし地圖及び記録あり
ありて考あるはなり是より即におわらう今此田の地とて
あるはありしはまも後の世よりいふ所ありし地とてありし

壬子物秋

藤原義壽



右慶長中江戶の事由乃説め新人の事と云々應

志

然るに圖めたるは後人より考別あり考す
天保人といふとら川といふもの



266 江戸同書

孝長年中江戸の事由 御城をとりめて大谷氏邸宛所
屋のそとありしめ山川の如き所もこの神社傳圖ありし江戸外
にもおひて記ありあまをたせふありし地圖及び記録あり
ありて考あるはなり是ヨリ即ハおろし今此田の地々も
あるはありへしまも後の世よりいふ所あれは誤りなりあはじ

壬子物秋

藤原義壽志



右慶長中江戸の事由乃説め新人の事と云々應

志

然るに圖め此は是る徳政人由乃事別め考す
天保人と此とら別しとるもの



